

神田川（その2）



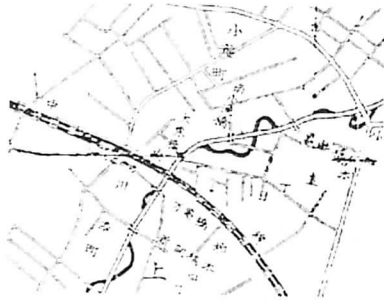
明治末期の小滝端

三鷹市の「井の頭公園」が源流である『神田川』は、善福寺川・妙正寺川を合流させ隅田川に注ぐ全長24.6km、区部を流れるものとしては最大級の河川です。しかし、最初から現在のような遊歩道のある立派な川だったわけではなく、昭和の初期までは幅員広狭・

勾配緩急な蛇行する川（左図・太線）でした。従来は上水、また産業用水として役目を果たしてきましたが、郊外の都市化、道路の整備など環境が変わると多少の雨でも吸収できず洪水が頻出、流域に甚大な被害を度々与えました。大正14年10月の洪水は氾濫面積約百ヘクタール（30万坪）、当時の金で百万円、大正10年から5年間で総額二百四十万円に上る被害を出したとの記録があります。

このような事態を重く見た政府は、昭和5年から8年に至る4年間の継続事業として大改修工事を行いました。

私が旧東中野小学校（現在の第三中学校の場所）に一年生として入学した昭和7年、いままでの川は校庭として整備され新しい『神田川』が完成しつつありましたが、そこではもはやメダカや蛍を採る事はできませんでした。



改修工事後の河川図。太線部分が改修前

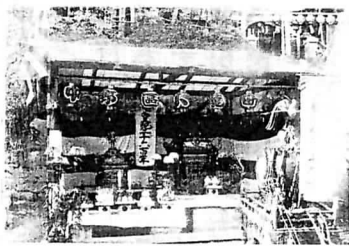
引用資料…神田上水、妙正寺川改修工事概要（東京府・昭和15年発行）／神田川激甚災害対策特別緊急事業（東京都・平成8年発行）／東京近郊地名所図絵（明治44年発行）

この町の『祭礼』

※今回は『神田川』の連載をお休みして、氷川神社の祭りについてのお話をします。

毎年9月14日・15日の二日間、戦時中の一時期を除いて、祭礼が挙行されています。年に一度、町中が燃える日、皆さんそれぞれの思い出があることと思います。

ここに戦前の写真が2枚あります。上段の写真は、小生（最前列右から3番目の子ども）の年恰好から推定すると、昭和5・6年頃かと思われます。私を支えているのは父、その右に錫杖を持っているのは兄、そして前列一番左にいるのは祖父と、親子三代が写っています。一人一人を紹介すると制限字数を越えるのでやめますが、いわゆる町会の「先住民族」の顔ぶれです。



下段の写真は昭和15年、当時は西暦は禁物、日本独自の「皇紀」を採用、二六〇〇年がこの年となりました。神酒所の両端には「日の丸」と「旭日旗」が掲げられているのも時代の表れでしょうか。

二枚の写真はいずれも滝山稲荷の前に設けられた神酒所の前で写したものです。御輿には「樽御輿」というものがあり、子どもに人氣がありました。父と夜なべで作った当時が懐かしく思い出されます。

町や人の姿は年を追って変わってきましたが、祭りは人々の心を現在まで伝えてきました。